

## ◇とうかん夜

我が家では、生活のメリハリと季節感をエンジョイするため、年中行事である正月のお飾りと元日に子供らの家族との新年会は当然として、節分、ひな祭り（娘の雛様を引っ張り出して飾る）、端午の節句（小型の鯉幟と兜を飾る。大きいのは市に寄付）、十五夜・十三夜（ススキと饅頭は必ず備える）は必ずやっている。ところが、七夕（子供らが幼稚園の時は小さな飾りを飾ったが）や十日夜は材料の調達等に難がありやらないが、思い出しては懐かしんでいる。そこで、そろそろ11月がやってくるので昔の「とうかん夜」の思い出を振り返ってみた。

とうかん夜（十日夜）は、田圃にいた神様が山に帰るとされる11月10日（旧暦の10月10日）だった。とうかん夜の晩は、藁を束ねて縛りあげた「藁鉄砲」で地面を叩きあげるのである。

もとは藁鉄砲の打つ音によって、モグラなどの田畑の害獣を追い払う行事とか、農村の仕事納めと山の神様に感謝する民族行事だとか、「大根の年取り」（突く音によって大根が太る）だとかいろんな言われ方をした。

生まれ故郷では「とうかん夜」の晩はきまって、近所の子ども達や若衆が我が家（生家）の門先の橋のたもとにちょっとした広場に集結し、藁鉄砲を作って深夜まで遊んだ。非農家の先輩たちは自家に藁鉄砲の材料はないので、農家である我々は命令されるがままに、藁、荒縄、芋がらなどの材料を用意させられた。この日ばかりは材料を持ち出しても親の了解を得ていたのだから、咎められることはなかった。藁鉄砲の製作は、藁束（仕上がり直径15cm前後）の中に里芋の芋殻等を芯にして、荒縄で稲束の回りを堅く縛りあげ、穂先の握手を結わえて出来あがる。

藁鉄砲作りは我々年少では上手にできないので、先輩達が主体で作りあげた。出来上がると具合はどうかと先輩が、力いっぱい地面に叩きつけ音の良し悪しをチェックする。音色によって、芋殻の増減や束の締め直しをしていくつも作った。

出来上がったら、みんなで「とうかん夜藁鉄砲、夕飯食ってぶったたけ！！」と大声を張り上げながら一斉に地面にたたきつける。繰り返して地面にたたきつけながらその音色の良し悪しをあれこれと評価しあつたのである。うんうん、なんとかいい音だなと得意になった。上出来なものは「ドスーン、ドスーン」とスーパーウーハーから出るような極低音の音色にみな酔いしれた。そこで、藁鉄砲が壊れるまでみんなで交代で叩き上げ遊んだのである。

昭和20年代は、テレビやテレビゲームなどの娯楽があるわけで無し、秋の夜長を楽しむため、何かと屁理屈（とうかん夜だからと云えば、親も駄目と云えない）をつけては皆で集まり夜遊びをしたかったのである。この、「とうかん夜（十日夜）」が過ぎた頃からきまって強い西風が吹き始め、冷え込みも一段と厳しくなり本格的な冬将軍がやってくる前兆ともなった。

これからはばらばらは田んぼの小麦播き、稲束の荷揚げ（稲刈りをした直後のものは生乾きなので乾燥を兼ね、「ニュー」と呼ばれる方法で田んぼに積んで置いた）、脱穀、籾擦り、米の政府供出など農作業が山ほど待っていて猫の手も借りたいほどの繁忙期になるのである。

「とうかん夜」の晩から10日もすると恵比寿講（11月20日）で、この日は朝から煙火

## 大槻伸次



花火があがった。父は、夕方早めに農作業を切り上げて恵比寿様のお宝を受けるため出かけることになっていた。そこで、恵比寿講の日は父にとって公認で出かけられるので朝から仕事が落ち着かない様子だった。その光景が今でも手にとるように懐かしく思い出される。この日の夕食のおかずはきまって秋刀魚だった。